

ブラウン夫人のひめごと

2006(平成18)年8月24日宣伝用DVD鑑賞(8月26日からOS劇場で上映中)

★★★★



監督・脚本＝ローラン・ブーニク／脚本＝ジル・トーラン／原作＝シュテファン・ツヴァイク／出演＝アニエス・ジャウィ／ミシェル・セロー／ニコライ・コスター＝ワルドー／ベレニス・ベジョ／クレモン・ヴァン・デン・ベルグ／フランシス・バーバー（ワイズポリシー配給／2002年フランス映画／105分）

……フランス「愛の3部作」の第一弾は、シュテファン・ツヴァイクの小説『女の二十四時間』を大胆に脚色したもの。①1910年、②1935年、③2001年という、3つの時間軸を錯綜させながら描かれるのは、すべてを捨てて燃え上がる女の恋……。『エマニエル夫人』（74年）を彷彿させる（？）怪しげなタイトルながら、ハードなセックス描写はゼロ。しかしエロティックな香りを漂わせながらの愛の描写は、やはりフランス映画がベスト……。さて、あなたは、この映画からどんな愛のお勉強を……？

フランス「愛の3部作」の第1弾

2006年8月26日から梅田のOS劇場で上映されているフランス「愛の3部作」の第1弾は、かつての『エマニエル夫人』（74年）を彷彿させる（？）、いかにも悩ましげなタイトルの『ブラウン夫人のひめごと』……？

一般的に日本人は現代フランス文学に疎いし、私も全然知らなかったが、これはシュテファン・ツヴァイクの有名な小説『女の二十四時間』を題材として、ローラン・ブーニク監督らが大胆に脚色し直したものとのこと。小説の基調となっているのは1910年の物語らしいが、映画では①1910年、②1935年、③2001年という3つの時間軸を重ね合わせる中で、現代にも通じる物語としている。しかし、これだけ長期にわたって3つの時代が変幻自在に移り変わっていくから、ちゃんと集中してスクリーンを観ておくことが必要……。

舞台は夏のリビエラ……

森進一のヒット曲に『冬のリビエラ』という曲があったが、この映画の舞台は夏のリビエラ……。リビエラは南仏にあるが、リビエラの夏のリゾート地にあるコテージとその近くにある華やかなカジノが、この映画の主な舞台。

まずは2001年……

まずは2001年の今、元外交官の年老いたルイ（ミシェル・セロー）は、カジノで19歳の女性オリビア（ベレニス・ベジョ）と出会った。オリビアは彼氏と一緒にカジノに来ていたところ、彼氏が紳士淑女の遊び場にふさわしくない言動をしていたため叩き出されたのだが、その恨みのためか男はいきなりルイに殴りかかってくる始末……。そんな乱暴な彼氏とケンカし、しつこくつきまとってくるのを振り切るため、オリビアがとっさにルイのタクシーに乗り込んできたのが2人の不思議な運命の始まりだった。ルイはなぜ2001年の今、ここにやって来たのか……。そして、ルイがオリビアに語って聞かせた昔の物語とは……？

第2次世界大戦直前の1935年……

時代は変わって第2次世界大戦直前の1935年。この夏、ルイ（クレモン・ヴァン・デン・ベルグ）は両親とともにリビエラのコテージに滞在していたが、当時のルイは10代で、生きることに何の楽しみも見出せない無気力な少年。そんな中発生した大事件は、ルイの母親が突然テニスのコーチと駆け落ちしてしまったこと。ルイの父親は嘆き悲しみ、避暑客の間では非難の大合唱が始まったが、なぜか滞在者の1人であったブラウン夫人（アニエス・ジャウイ）だけはそんな母親を擁護。さて、それはなぜ……？

1910年の物語を語るブラウン夫人は何者……？

ブラウン夫人はある富豪と結婚し幸せな生活を送っていたが、20年以上前に夫が死亡してからは、彼女は脱け殻状態となり、すべての生きる希望を失っていた。時は、夫の死亡後数年経った1910年。そんなブラウン夫人を元気づけるためリビ

エラ旅行に誘ったのは、義妹のエリザベス（フランシス・バーバー）。彼女はいつも快活で、人生に前向きだったが、そのエリザベスは重大な病気を抱えてそれと闘っており、実際にその1年後には死亡することに……。

エリザベスに誘われるままカジノに入ったブラウン夫人は、バクチそのものには全く興味がなかった。彼女が興味を持ったのは、ある男の繊細な手。ルーレットに集中しているその手の主は、ポーランドの貴族で将校でもある若い男アントン（ニコライ・コスター＝ワルドー）だった。そして、ブラウン夫人はなぜかそんな美しい手の持ち主アントンに急速に惹かれていくことに……。

そんな1910年当時の物語をブラウン夫人が1935年の今、わざわざ親を失って狼狽している若いルイに語って聞かせるのは、一体何のため……？ そして、ブラウン夫人はその男アントンと、その後一体どんな関係に……？

アントンは破滅型男の典型だが……？

スクリーン上で見る限り、アントンはいい男だし、ルーレットの賭けっぶりも潔いもの。しかし、賭け事において最も重大なことは、結局、勝つか負けるかということ。そして、アントンはブラウン夫人の秘かな応援にもかかわらず、遂に勝負に負け、一文なしに……。そしてアントンはそのまま1人自殺しようとした……。

ずっとそんなアントンを注視していたブラウン夫人はそれを押しとどめ、彼を金銭的に援助することを約束する中、そのまま2人は一夜を共にすることに。ここらあたりの描き方がいかにもフランス映画……。説明を全く入れないまま、はじめて出会った2人がベッドの中に入っていくまでになる必然性をいかに説得力をもたせるのかは決して易しいことではないが、さすがに「愛の3部作」の第一部だけのことは……？

ブラウン夫人の一夜の恋はホンモノ……？

20年以上前に夫を亡くし生きる希望を失っていたブラウン夫人。エリザベスはそんな彼女を元気づけるためにリビエラ旅行に誘ったのだが、ブラウン夫人はそんなエリザベスの思惑とは全く違うことで元気を取り戻すことになった。たった

一夜の男との出会いで女がこれほど変わるものかと私などはビックリしてしまうし、「一晚中心配していたのに一体ナニをしていたのか」とエリザベスが怒るのも当然……。

ところが一夜の恋(?)で突如アントンへの愛が芽生え人が変わってしまったブラウン夫人は、今やアントンに尽くすことだけが生き甲斐となっていた。そんなブラウン夫人は、その愛の力によって(?)アントンに賭博をやめると誓わせ、故郷のポーランドに戻ると決めたアントンについていく決心までも固めていた。そしてエリザベスの制止を振り切り、期待に胸をはずませながら、約束の時間に駅まで馬車を走らせたブラウン夫人だったが……?

年増女の深情け……?

ここで無事駆け落ち成功となれば、トルストイの「アンナ・カレーニナ」風になる(?)のだが、ブラウン夫人の場合はある意味で年増女の深情け……? 何と駅にアントンは来ていなかったのだ。そして、失意のうちに1人カジノに戻ってきたブラウン夫人の目にうつったのは、彼女からもらったお金で、昨日と同じようにルーレット賭博に興じているアントン。そのあまりの姿にブラウン夫人は絶句したが、ルーレットに夢中になっているアントン、そして今日は勝負運に恵まれ、勝ち続けているアントンには、ブラウン夫人の姿など目に入るはずがなかった。そんなアントンの後ろに立ち、「なぜ……」と問いかけるブラウン夫人に対するアントンの返事は「放っておいてくれ」という実につれないもの……。そんな「破滅型」のアントンの行きつくところは結局同じ……。アントンの自殺は、1日遅れただけで結局は決行されることになったが、それでもブラウン夫人の「24時間の恋」は忘れられないものになり、「今でも彼の夢を見る」とのこと……。

そんなアントンとの「24時間の恋」の物語をブラウン夫人から聞いた10代のルイは、その話をどのように受けとめたのだろうか……? そんな時、ブラウン夫人と同じようにテニスのコーチと駆け落ちしようとしたルイの母親がコテージに舞い戻ってきた。これを非難する目で見つめる多くの避暑客たち……。しかしルイのまなざしは既に、そんな母親を許すやさしいものになっていた……?

2001年の今……

10代のルイが、ブラウン夫人から「24時間の恋」の話を聞いたのは1935年。そして今70歳を大きく越えたルイが再びリビエラにやって来たのは人生の終末を悟り、その幕をこの思い出の地で下ろすためだった。しかし65年前と同じように、あのカジノの中で偶然知り合った19歳の少女オリビアにこんな昔話を語り終えたルイの表情には明らかな変化が……。

人はいくらお金があっても1人では生きていけないもの。人間が生きる希望を持つのは結局他の人間との依存関係にもとづくものだということが、何のナレーションもないまま淡々と思い出話が語られていくこの映画の中でよくわかる。ちょっと難しいが、何ともおしゃれな(?) フランス映画に拍手……。

2006(平成18)年8月31日記

ミニコラム

美の改革者、武智鉄二監督

武智鉄二監督の『黒い雪』(65年)は、「わいせつ凶画公然陳列罪」で起訴され、日本国中が表現の自由をめぐる憲法解釈とエロスか芸術かという論争で沸いたが、当時高校生の私にはそれは別世界……。また、路加奈子、石浜朗主演の『白日夢』(64年)をさらにハードにした佐藤慶、愛染恭子主演の『白日夢』(81年)や『紅閨夢』(64年)も見逃していた。

そんな中、07年3月3～16日シネ・ヌーヴォで「美の改革者 武智鉄二全集」が開催されたため、3月4日(日)、『戦後残酷物語』(68年)、『浮世

絵残酷物語』(68年)、『華魁』(83年)の3本を続けて鑑賞した。武智鉄二監督の描くエロスの世界に圧倒されたが、それ以上の収穫は彼のプロフィールを学んだこと。彼が映画監督として権力と闘ったことはよく知られているが、歌舞伎・能・義太夫・オペラなど古典芸能全般に精通していた彼が、第2次大戦後関西で武智歌舞伎を創設し、多くの人材を育てたことは、私たちの世代はほとんど知らないはず。そんな彼には、まさに「美の改革者」の称号がピッタリ!

2007(平成19)年3月10日記